

ある時点における場の定義(1943年)

クルト・レヴィン

場の理論と位相空間

新しい理論の受容の歴史は、しばしば以下の段階を示す。まず、新しい考えは、純粋なナンセンス、見る価値がないものとして扱われる。次に、新しい理論は風変わりすぎる、或いは単なる新しい専門用語にすぎない、実りがなく、単に間違っている、といった具合に、多くの矛盾した異議が提起される時が到来する。最後に、誰もが、常にこの理論に従っている、と主張するように見える状態に到達する。これは通常、一般的な受容前の最後の状態を示している。

心理学において場の理論へのトレンドが高まっていることは、近年分派した精神分析学(カーディナー、ホーナイ)や、条件反射理論で目立っている。私のように長年、場の理論を支持してきた心理学者らが、この理論の本質を明確にするのにあまり成功していないので、このトレンドは、場の理論の意味を解明することを重要なものにしていく。私が見ている唯一の釈明は、この問題はあまり単純ではない、ということである。物理学や哲学は、場の理論の意味について心理学者に役立てられるような分析研究をあまり行っていないように思える。更に、場の理論のような手法は、実のところ、手芸の手法と同じようなやり方、つまり実践を通じて学ぶことでしか、理解したり習得したりできない。

ヒルガードとマーキスは、クラーク・ハルの手紙から次の文を引用する。「私の見るところ、行動の様々な可能性を、一つ以上の変数の同時的な状態に依存するものとして、非常に一般的な形で表現した瞬間、その人は、現在、場の理論と呼ばれているものの実体を捉えている」場の理論が、あらゆる事象は多数の因子の結果である、という事実の重要性を強調している点は正しい。このような相互依存した多数の因子を公正に表現する必要性を認識することは、場の理論へ踏み入る第一歩である。しかし、それでは充分ではない。場の理論は、もっと具体的なものである。

例を挙げると、あるスポーツでの成功は、筋力、動きの速度、素早く判断する能力、方向と距離の正確な知覚、の組み合わせに依存しているかもしれない。これら5つの変数のいずれか1つが変化すると、その結果はある程度変わるかもしれない。これらの変数は、5次元の図として表現できる。これらの因子の考えられ得る集合の結果は、成功の大きさに対して、この図の一点としてマーキングすることができる。こうして、これらの点を総合したものは、このような依存性、言い換えれば、経験法則の図式表現となる。

物理学では、1つの事象に影響を与える多くの因子のこのような表現が頻繁に用いられる。温度、圧力、時間、空間的位置といった、ある種の特性的各々に対して、1つの次元が設定される。物理学におけるこのような表現は「位相空間」と呼ばれる。20の因子を考慮しなければならないならば、そのような位相空間は20次元になるかもしれない。位相空間とは、物理的な物体が動いている3次元の「物理空間」とは明らかに異なるものである。同様に、

心理的移動や構造的変化が起こる心理空間、生活空間、心理的場は、次元が単なる特性の階調を意味するこのような図とは異なるものである。

これらの疑問を第一線の理論物理学者と議論した結果、私たちは、多くの因子を、1つの事象を決定するものとして認識することは、また位相空間として表現することさえ、場の理論を前提としないことに同意した。心理学において、サーストンの因子分析は、様々な因子のそのような関係を扱う。いかなる特徴プロファイルも、多くの因子を認識する。場の理論家もそうでない理論家も、これらの有用な手法を活用できるが、そうであるからこそ、それらを使うすべての人が、場の理論家というわけではない。

場の理論とは何か?これは非常に一般的な理論なのか?物理学において、特定の法則や理論(自由落下物体の法則といった)から、より一般的な理論(ニュートンの法則といった)、または更に一般的な理論(マクスウェル方程式といった)へと進んでいったとしても、最終的に場の理論に至る**わけではない**。言い換えれば、場の理論は、通常の意味での理論と呼ぶことが殆どできない。

この事実は、理論の正確さ、および不正確さと、場の理論としての特徴との関係を考慮すると、更に明らかになる。物理学や心理学における特殊な理論は、場の理論かもしれないが、それでも間違っている。一方で、ハンス・ファイゲルが「最低レベルの経験的理論」と呼ぶものの記述は、場の理論でなくとも正しいかもしれない(しかし、私は、より高いレベルの構成概念に関する理論は、場の理論でなくとも、心理学において正しい可能性がある、とは思っていない)。

従って、場の理論を、その用語の通常の意味において、ある理論と同じやり方で正しいとか正しくないとか言うことは殆どできない。**場の理論はおそらく、ある方法、すなわち、因果関係を分析し、科学的構造を構築する方法として最もよく特徴づけられる**。因果関係のこのような分析方法は、変化の条件の「本質」に関する、ある種の一般的な記述の形で表現できる。そのような記述が、どの程度「分析的」(論理的、**先験的**)であるか、どの程度「経験的」な特徴を持つか、はここで議論する必要がない。

同時性の原理と、過去および未来の効果

心理的場の理論の基本的な記述の一つは、以下のように定式化できる。心理的場におけるあらゆる行動の変化、もしくはその他の変化は、**その時点の心理的場**にのみ依存する。

この原理は、場の理論家たちによって最初から強調されてきた。場の理論家は歴史的問題や、過去の経験の効果に関心がない、と意味するように、しばしば誤解され、解釈されてきた。

これ以上の間違いはあり得ない。実際、場の理論家は、発展的問題や歴史的問題に最も関心を持っているし、ほんの数秒しか続かない古典的な反応時間の実験から、数時間や数週間にわたって体系的に作られた歴史を含む経験的状況へと、心理学実験の時間的範囲を拡大する役目を確実に果たしてきた。

もし、同時性という場の理論の原理の解明が達成できれば、心理学の様々な学派の間で1つ

の理解を見る際に最も有益である、と私は感じている。

この広範な原理の意味は、古典物理学におけるその応用に注意を向けることで比較的容易に表現できる。

物理世界の点 x での変化は、通常 dx/dt 、つまり、差分時間幅 dt での位置 x の差分変化として特徴づけられる。場の理論は、時刻 t における変化 dx/dt は、その時刻 t における状況 S^t に依存する、と述べている(図 1)。

$$(1) \frac{dx}{dt} = F(S^t)$$

更に、これは、過去や将来の状況に依存しない。言い換えれば、式(1)は正しいが、式(1a)は正しくない。

$$(1a) dx = F(S^t) + F^1(S^{t-1}) + \dots + F^2(S^{t+1}) + \dots$$

もちろん、物理学では、ある変化と過去の状況 S^{t-n} (ここで、 $t-n$ は直前の t ではない時間である、 $|t-n| > dt$) との関係を示述することができる場合がある。言い換えれば、技術的には以下のように書くことができる場合がある。

$$(2) \frac{dx}{dt} = F(S^{t-n})$$

しかし、これは、その後の状況 S^t が、その前の状況 S^{t-n} にどのように依存するかが分かっている、言い換えれば、式の中にある関数 F が、

$$(3) S^t = F(S^{t-n})$$

と分かっている場合にのみ可能である。このような知識は通常、(a) どちらの状況も発生同一的である「閉じた系」であること、(b) 前の状況 S^{t-n} のすべての点の変化を扱う法則と、前の状況 S^{t-n} と後の状況 S^t の間の状況における変化を扱う法則が知られていること、を前提とする。

ある変化を過去の状況と式(2)によって結び付ける意味は、現在の変化を未来の状況 S^{t+n} と結び付けるのと同じやり方で、以下のように書くことができる、と指摘することにより、最も明らかになるかもしれない。

$$(2a) \frac{dx}{dt} = F(S^{t+n})$$

これは、私たちが、 $t+n$ までの時間幅 t で「閉じた系」を扱わなければならないときにはいつでも、またこの時間幅の間に進行している変化の法則が分かっているならば、可能である。この関数式を書く可能性は、将来の状況 S^{t+1} が、現在の変化 dx/dt の「条件」として着想されていることを意味しない。実際、閉じた系が時間($t+n$)より前に壊されたとしても、同じ dx/dt が発生する。言い換えれば、変化 dx/dt はその時点での状況(S^t)にのみ依存する(式(1)に沿って)。この変化を未来や過去の時間の関数として数学的に表現する技術的可能性は、この事実を変えることがない。

心理的場におけるあらゆる変化をカバーする行動という用語を私たちが理解しているのであれば、物理学における dx/dt に相当するのは、心理学における「行動」という概念である。そうすると、場の理論の、心理学における同時性の原理は、時刻 t における行動 b は時刻 t における状況 S だけの関数であり(S は、ある人物と、その人のいる心理的環境の両方を含むことを意味する)、

$$(4) b^t = F(S^t)$$

更に、過去または未来の状況 S^{t-n} や S^{t+n} の関数ではない、ということの意味する(図 2)。繰り返しになるが、行動 b を、過去の状況(S^{t-n})または未来の状況(S^{t+n})に間接的に関連づけることは可能だが、これも繰り返しになるが、これらの状況が閉じた系であり、その時間幅の中で起きている変化が既知の法則により説明できる場合にのみ、そうすることができる。心理学者らは、この公式の重要性をますます認識しているように思える。

ある時点における場の特性を判定する方法

その時点の状況から行動を導き出さなければならないなら、「ある時点での状況」の特徴を**決定**する方法を見つけなければならない。この決定は、心理学的にも哲学的にも興味深いと思いがっているいくつかの疑問を暗示している。

現在の状況の特性を決定したり — 医学用語を使ったり — 診断を下したりするために、二つの異なる手順を踏むことができる。ある人は、歴史(**想起**)から得られる結論に基づいて発言するかもしれないし、別の人は、**現在の診断検査**を用いるかもしれない。

簡単な例を挙げると、私は、屋根裏の床が、ある重さを支えられるほど十分に強いかどうかを知りたいと思っている。私は、10 年前に家が建てられたときに、どんな材料が使われていたかを知ることにより、この知識を得ようとするかもしれない。良質な資材が使われており、建築家は頼りになる人物だった、という信頼できる報告を得たので、私は、その重さはおそらく安全だろうと結論づけるかもしれない。もし、元の設計図を見つけることができれば、私はいくつか正確な計算を行い、より安心を感じることができるかもしれない。

もちろん、作業員が実際には設計図に従っていなかったり、虫が木造部分を弱らせたり、過去 10 年間でいくつか再建が行われたりした可能性は常にある。従って、私は、過去のデー

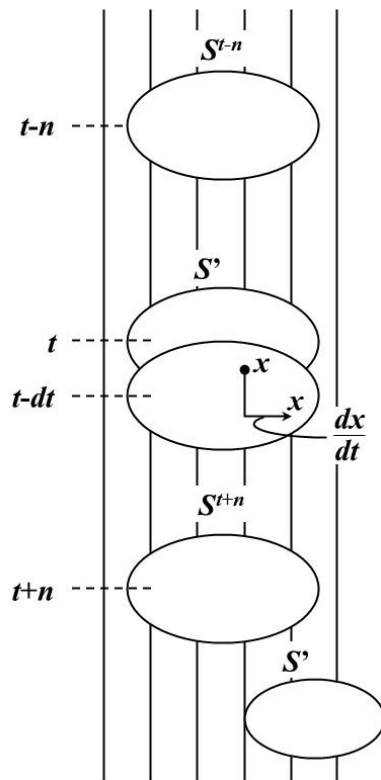


図 1. $t+n$ に至る $t-n$ の間の S は「閉じた系」であるが、 S は S' と発生同一的ではない。
 dx/dt は x の速度を示す。

タから得たこのような不確かな結論を避け、たった今、床の強度を検査することにより、現在の強度を決定することを決断するかもしれない。このような診断検査では、絶対的に確実なデータは得られないだろう。データがどれだけ信頼できるかは、利用可能な検査の質や、検査の慎重さに依存する。しかし、現在の検査の値は、方法論の観点から、**想起**の値よりも優れている。**想起**には、論理的に二つのステップが含まれる。すなわち、過去における(木造部分の品質、サイズ、構造の)ある種の特性的検査、そして、その間に干渉してきた未知のものが無いという証明、である。言い換えれば、私たちは「閉じた系」に対処しなければならない。たとえ、ある系が外部から手つかずに残されているとしても、内部の変化は起こる。従って、更に、ある状況の特性を、**想起**を通じて決定しなければならないなら、これらの内部の変化を支配する法則を知っておかなければならない。

医学、工学、物理学、生物学は、過去に向かう探求と、現在の検査の両方の方法を用いることに慣れている。しかし、可能な限り後者が好まれる。

心理学では、特に古典的な精神分析や、人格の問題に対する他の臨床的アプローチにおいて、**想起**による診断をあまりにも過度に用いてきた。知覚心理学や記憶心理学は、歴史的な診断タイプから比較的自由だった。実験心理学は、全体として、現在の状況を検査する方向に進

歩的なトレンドを示している。

その時刻 t で検査することにより、ある状況 (S) の特性を決定する方法は、歴史的な結論の不確実性を回避する。しかし、この方法が時間幅の考慮を完全に排除するわけではない。「ある時点での状況」とは、実際のところ、時間の延長がない瞬間を指すのではなく、一定の時間幅を指す。この事実は心理学にとって理論的かつ方法論的に非常に重要である。

物理学の手続きに少し立ち返ることが参考になるかもしれない。図 1 の垂直線が、いわゆる物理的な「世界線」を表すとすると、状況とは、ある時刻 t で、これらの線を切断することを意味する。このような状況の記述には、(1) その時点における場の一部の相対位置、(2) その時点で起きている変化の方向と速度、が含まなければならない。第一の課題は、異なる実在に一定のスカラー値を帰することで全うされる。第二の課題は、それに一定のベクトルを帰することで全うされる。第二の課題には、私が議論したいと思っている難しさが含まれている。

ある瞬間に起きている変化の方向と速度を記述するには、ある時間幅の事象に注意を向ける必要がある。理想的には、そのような決定に対して、時間差分があれば充分なはずである。実際には、その時間差分を決定するのに、マクロ的な時間間隔、或いは少なくともその間隔の開始時における位置と終了時における位置を観察しなければならない。最も単純な場合、ある時点の速度は、そのマクロ的な時間間隔の間の平均速度と等しいと仮定される。私は、物理学におけるこの手順の詳細を追及するつもりはない。充分な法則が知られているなら、ドップラー効果に基づく、このようなある種の間接的な手法は、異なる手順を認めるものである。

しかし、ある瞬間の状況を適切に記述することは、一定の時間幅の観察なしには不可能である、という基本的な事実は依然として残っている。この観察は、(「最も妥当と思われる」仮定と、物理法則についての私たちの知識に基づき)「時刻 t における出来事の状況」の記述への変換を認めるやり方で、解釈しなければならない。

心理学にも同様の問題が存在する。その人は、ある時点で「a」と言っている最中かもしれない。実際、そのような記述はすでに、一定の時間間隔が観測されていることを意味する。そうでなければ、口や身体の明白な位置しか記録できないだろう。通常、心理学者は、進行しているプロセスのそのような特徴づけでは満足しないだろう。彼は、この「a」が「can」という単語や「apple」という単語に属しているかどうか、或いはどの単語に属しているのか、を知りたいと思う。もし、その単語が「can」なら、心理学者は、その人が「I cannot come back.」と言いたかったのか、「I can stand on my head if I have to.」と言いたかったのか、を知りたいと思う。心理学者は、この文が、将来の個人的な計画に関する会話の一部として、親しい友人に話されたものなのか、或いはこの文が、政治的な演説の一部であるかどうか、耐え難い政治的立場から退こうとする意味を持っているのかどうか、さえ知りたいと思う。

言い換えれば、特徴と、進行しているプロセスの方向と、についての適切な心理的記述は、

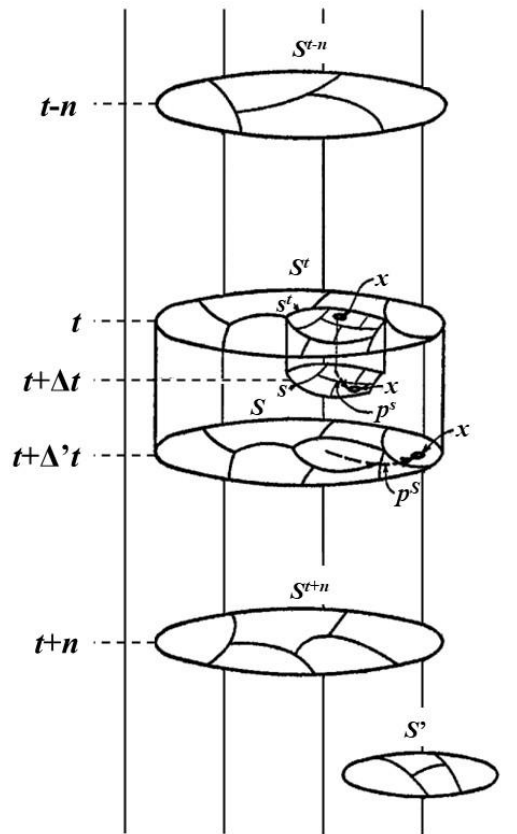


図 2. $t+n$ に至る $t-n$ の間の S は「閉じた系」であるが、 S は S' と発生同一的ではない。
 $s^{t+\Delta t}$ は、比較的小さな領域に広がり、 $t+\Delta t$ に至る比較的短い時間幅 t を含む、小さな時間-場-単位である。 $S^{t+\Delta t}$ は、より広い領域をカバーし、 $t+\Delta't$ に至るより長い時間幅 t を含む、より大きな時間-場-単位である。 p^s と p^s は、小さな時間単位の間と大きな時間の間での位置 x における変化を示す。

様々な微視的レベルおよび巨視的レベルで行うことができるし、行わなければならない。「行動単位のサイズ」ごとに、異なる「状況のサイズ」を調整することができる。私たちの例だと、個人が「a」と言っていることは、その個人の周囲の状況をあまり考慮しなくても確認することができる。この文を政治的幕引きの一部として特徴づけるには、周囲の状況を更に考慮しなければならない。

行動の心理学的方向と速度(すなわち、通常「心理的事象の意味」と呼ばれるもの)を決定するには、物理学のように、心理学でも、ある時間幅を考慮しなければならない、ということ、場の理論の基本命題の一つとして、同時性の原理を変えることなく、私たちは認識しなければならない。この時間幅の長さは、心理学の場合、状況の範囲に依存する。一般的に、記述すべき状況が巨視的であればあるほど、ある時点における行動の方向と速度を決定するために観察すべき時間幅は長くなる(図 2)。

言い換えれば、心理学では「状況単位」を扱っており、それらは場の次元や時間の次元に関して拡張性を持つものとして考えなければならない。もし、私が間違っていなければ、物理学の現代量子理論にとって非常に重要な時間-空間-量子の問題は、方法論的には(もちろん、より高度なレベルでは)心理学の「時間-場-単位」の問題に沿ったものである。

異なる範囲の状況の概念が、それがなければ寧ろ難解になる多くの問題を解決するうえで非常に役に立つことが証明されている。トールマン、ミュンジンガー、フロイド・オールポートは、心理的記述には微視的事象だけでなく、巨視的事象も含めなければならない、と強調している。バーカー、デンボ、レヴィンは、プロセス単位の3つのサイズと、それに対応する状況のサイズを数学的に区別し、扱っている。彼らは、時間-場-単位の2つの異なるサイズに関して、重複する状況に注意を向け、拡張された時間幅の間でフラストレーションの強さを測定するある種の問題に対処した。リピットとホワイトは、社会的雰囲気の研究において、事象についての更に大きな時間幅を区別している。彼らは、これらの巨視的単位の開始と終了を極めて正確に、かつ非常に満足いく信頼感で以て決定できることを示した。しかし、私たちは方法論的問題にのみ関心があるため、ここで、これらの問題について議論するつもりはない。

ある時点における心理的場の一部としての、心理的な過去、現在、未来

過去と未来の問題を明確にすることは、ある時点に存在する心理的場には、その個人の未来と過去に関する見解も含まれている、という事実によって、大幅に遅れている。個人は単に自分の現在の状況を見ているだけではない。彼には、未来に対するある種の期待、願い、恐れ、空想がある。彼自身の過去についての見解や、物理的世界や社会的世界の残りの部分に対する見解は、しばしば誤っているが、それでも彼の生活空間において、過去の「現実レベル」を構成している。更に、過去に関する願望レベルを頻繁に観察することができる。心理的過去のこのような願望レベル—或いは非現実レベル—の構造と、現実レベルとの乖離は、罪悪感の現象において重要な役割を果たす。心理的未來の構造は、例えば、希望や計画と密接に関連している。

フランクの専門用語に従えば、私たちは、現実レベルと様々な非現実レベルに心理的過去と心理的未來を含む「時間的展望」について話している。ある時点に存在する時間的展望は、アスピレーション・レベル、気分、積極性、個人の主体性、といった多くの問題に対して非常に重要であることが示されている。例えば、ファーバーは、囚人の苦しみの量は、現在の刑務作業の快適さや不快さよりも、5年先になるかもしれない釈放に関する期待に大きく依存することを示した。

心理的過去と心理的未來は、ある時刻 t に存在する心理的場の同時的部分であることを理解することが重要である。時間的展望は常に変化している。場の理論によれば、あらゆる種類の行動は、その時点での時間的展望を含む場の全体に依存するが、加えて、いかなる過去の場または未来の場にも、そこでの時間的展望にも依存しない。

この場の理論の観点から、条件反射理論の基本概念の一つ、すなわち、「消去」の概念に関連する方法論的問題を簡単に考察することは示唆に富むかもしれない。ある個人は、ある刺激、例えば鐘の音の後に、食べ物が現れるという体験をした。空腹であれば、その個人は食べ物を口にする。このような体験を何度かした後、その個人は、食事のベルが鳴るとすぐに、食事の準備に向けたある種の行動を示すだろう。このとき、その個人は「条件づけされている」と言われる。さて、実験者によって、この状況は密かに変わり、食事のベルの後に食事が現れなかった。しばらくすると、その個人はその意味を悟り、ベルが鳴っても食事の準備に向けた行動を示さなくなる。このプロセスは「消去」と呼ばれる。

ある時点における人の「習慣」は、現在の場の部分として扱うことができるし、扱わなければならない。それらを部分的に認知構造として表現すべきか、認知構造の変化に対する抵抗として表現すべきか、部分的に誘意性の構築や固着として表現すべきか、或いは他の方法で概念化しなければならないのか、はここでは問題にしない。思考の習慣だけでなく行動の習慣も、場の理論の研究で扱われる。

トールマン、ヒルガード、マーキス、その他の研究者らが正しく指摘しているように、消去だけでなく条件づけも、心理的未来の現実レベルにおける変化と関係している。場の理論家は、条件づけと消去に関して、二つのタイプの問題を区別しなければならない。一つ目のタイプは、期待が、一方で知覚にどのように影響され、他方で記憶にどのように影響されるか、という疑問を扱う。心理的現在の知覚構造の変化は、心理的未来の構造の変化にどんなことを引き起こし、心理的場のこれら二つの部分の相互依存性を支配する法則は何なのか?アスピレーション・レベルに関する研究は、将来の現実レベルの構造に影響を与える因子について、いくつかの知識を提供する。コルシュ・エスカローナは、未来の現実レベルが現在の行動を支配する力に及ぼす効果に関する数学的取り扱いに向けて一步を踏み出した。アスピレーション・レベルの研究は、心理的過去(すなわち、過去の成功や失敗)が心理的未来に及ぼす効果についてもかなりの洞察を与えた。この疑問が消去と密接に関連していることは明らかである。

これらのタイプの問題の方法論的立場は明確である。それらは、ある時点に存在する心理的場の様々な部分の相互依存性を扱う。言い換えれば、それらは、 $b^t = F(S^t)$ 型の正当な場の理論の問題である。

条件反射理論で扱われる第二のタイプの疑問は、後の状況 S^t (例えば、消去の間の)を、学習中の前の状況 S^1 や、類似の、または異なる複数の過去の状況 S^1, S^2, S^3, \dots と関連づけようとする。これは、行動を、反復回数と関連づける。言い換えれば、これらの疑問は、 $b^t = F(S^{t-n})$ または $b^t = F(S^{t-n}, S^{t-m}, \dots)$ の形式を持つ。ここで、場の理論は、より批判的で分析的なタイプの思考を要求する。少なくとも2つのタイプの問題を区別すべきである。

- a. その時点において認知された心理的状況 S^t がどのように見えるかは、実験者が食事を提供するかどうかも、同様の外部の物理的条件や社会的条件に明らかに依存する。たとえ、すべての心理法則が分かっているとしても、これらの因子を、過去の時点における個人の心理的場から導き出すことは到底できない、と誰もが同意するだろう。これらの因子は心理学とは無縁である。
- b. しかし、この第2のタイプの問題には正当な心理的疑問が残っている。私たちは、生活空間の境界条件を一定に保つか、ある時間幅の間に既知の方法で変化させ、その条件下で何が起こるかを調べることができる。これらの問題は間違いなく心理学の領域に属する。記憶痕跡の再構成の問題が一例である。これらのプロセスは、 S^t に至る総合の時間幅 S^{t-n} の間の個人の状態に依存し、例えば、寝ている間と起きているときで違うことが分かっている(図2)。条件反射に関する実験が、このタイプの問題に関する豊富な資料を私たちにもたらしたことは疑いない。それらは最終的に、冒頭で議論したやり方、すなわち、ある状況 S^t と直後の状況 S^{t+dt} の間の連続した関係として、扱わなければならないだろう。

全体として、私は、心理学のトレンドは確実にこの方向に向かっていると思う。例えば、目標勾配理論は元々、行動と過去の状況との関係として定式化された。公正で分析的な思考は、そのような記述をいくつかの命題に分けるべきであることを求め、その一つは、個人と目標との距離の関数として、目標に至る努力の強度を扱わなければならない。これは、ある種の力場に関する記述と同じであり、おそらく正しい。目標勾配理論に含意される第二の命題は、現在の行動を過去の状況 S^{t-n} と結び付ける。私の考えでは、具体的な形式は満足のものではない。しかし、それが正しかろうと、独立した理論として扱うべきである。ハルの「強化の勾配仮説」の定式化は、この方向への一歩である。

心理生態学

私たちの考察を精緻化するものとして、統計の役割に対するブルンスヴィック処理のいくつかの側面について議論したい。私は、心理学で統計が利用されるいくつかのやり方を批判したことで生じた誤解を、いつか笑って済ませられるとは思っていない。私は、定量的な測定には統計が必要だと常に認識していた。この記述は、「純粋な場合」、すなわち、理論と観察可能な事実を明確なやり方で結び付けることができる状況にも当てはまる。心理学が統計の不十分な目的をますます放棄しつつあるため、これ以上議論しても、実用的な価値は殆どないかもしれない。

しかし、ブルンスヴィックは、新しく重要な側面を明らかにしており、私は、その明確化は心理学的方法論全般に役立つかもしれないと感じている。

ある時点に存在する事実の範囲内で、心理学にとって変化が関心の的になる、または関心の的になるかもしれない三つの領域を区別することができる。

1. 「生活空間」、すなわち、心理的環境がその人にとって存在しているならば、その人とその心理的環境。ニーズ、モチベーション、気分、目標、不安、理想に注意を向けるならば、私たちは通常、この場を念頭に置いている。
2. その時点で個人の生活空間に影響を与えない、物理的世界または社会的世界の多様なプロセス。
3. 生活空間の「境界区域」、その時点における生活空間の状況に影響を与える物理的世界または社会的世界のある部分。例えば、知覚されるものは、物理的な「刺激」によって部分的に、すなわち、その時点において感覚器官に影響を与える物理的世界の部分によって決定されるので、知覚プロセスは、この境界領域と密接に結び付いている。境界区域にあるもう一つのプロセスは、ある行動の「実行」である。

ブルンスヴィックは正しく述べている。「レヴィンが予測できる「場」とは、言葉の厳密な意味において、彼の生活空間にいる人物のことである」そして、彼は続ける。「しかし、生活空間を、物理的刺激的地理的環境や、その環境で実際に達成された結果と混同してはならない。それは知覚後のものであり、かつ、行動前のものである」この記述は部分的に、すなわち、私の考えでは、知覚と行動が心理学の正当な問題である限り、間違っている。この見解は、ある場の境界条件がその場の本質的特徴である、という場の理論のアプローチの必然的な帰結である。例えば、境界区域に関連するべき知覚プロセスは、一部は心理的場の内部の状態に、すなわち、その人の特徴、動機、認知構造、知覚方法などに、そして一部は、生命体の外部の物理プロセスによって強制された結果、網膜やその他の受容体に広がる「刺激分布」に依存する。同じ理由で、物理的作用または社会的行動の問題は、心理学の正当な一部である。

しかし、ある時点での心理的場の一部として、その時点においてその人の生活空間に影響を与えない物理的世界または社会的世界の断面を私が捉えていない、と見なしていた点で、ブルンスヴィックは正しい。迷路の終点の扉の向こう側に置かれていて、従って匂いも姿も届くことのない食べ物は、動物の生活空間の一部ではない。もし、個人が、食べ物がそこにある、と知っているなら、この知識が行動に影響を与えるゆえに、この**知識**は当然、彼の生活空間に描写されなければならない。また、期待の確実性の程度も彼の行動に影響を与えるゆえに、個人が現在または将来の状況を捉える主観的確率も考慮する必要がある。

生活空間の中に、その時点の行動に影響を与えるすべてを描写し、それ以外は一切描写しない、という原理は、知覚されていない物理的な食べ物を含めることを妨げる。すでに述べた条件下で、この食べ物が、その時点での彼の行動に影響を与えることは到底できない。確かに、個人は、そこに食べ物があると思えば、たとえ実際にはそこに食べ物がなくても、旅を始めるだろうし、もし、彼が迷路の終点に食べ物があることを知らなければ、実際にそこにある食べ物に向かって移動することはないだろう。

ブルンスヴィックによれば、心理的場を上述したやり方で限定するなら、単なる統計上のル

ールではなく、法則の観点で思考することができる。しかし、この利得のために、人は、心理学の最もダイナミックな側面を、実際のところ目をつぶっている問題の領域に「封じ込める代償」を支払わなければならない、と彼は主張する。彼は、私の考えでは、除外すべき物理的世界や社会的世界のこのような部分を、心理的場を含めたいと考えている。これらの部分は、統計的なやり方で研究し、事象の発生確率を計算しなければならない、と彼は述べる。私の考えでは、主な問題は、「確率」という言葉が何を指すか、ということである。ブルンスヴィックは、死亡する確率に関する車の運転手の考えを研究したいのだろうか、それとも、そのような事象の「客観的確率」を語る事故統計を研究したいのだろうか。もし、ある個人が、天井は落ちてこないだろうと確信して部屋に座っているなら、行動を予測するために「主観的確率」だけを考慮すべきだろうか、それとも、エンジニアが決定するように、天井が落ちてくる「客観的確率」も考慮すべきだろうか。私の考えでは、考慮しなければならないのは、1つ目だけである。

私は、心理学がなぜ、生活空間の一部でない、或いは、現時点でその境界領域に影響を与えることのない、物理的世界や社会的世界のこのような領域にも関心を持った方がいいのか、理解できる。今後数年の間、子どもの教育を守りたいと望むなら、また、ある行動の結果として、どのような状況にあるかを予測したと望むなら、この未来を計算しなければならない。明らかに、そのような予測は、部分的には非心理学的データに関する統計的考察に基づいてなければならない。

理論的には、この課題を、ある時間幅における生活空間の「境界領域」を決定するのは、物理的世界や社会的世界のどの部分かを発見すること、と特徴づけることができる。この課題は、心理学者らの関心を引く価値がある。私は、これを「心理生態学」と呼ぶことを提案する。

ある個人の「生活史」に関するいくつかの問題は、ここに位置づけられる。短期間だけでなく長期間にわたる生活空間の境界条件は、部分的にはその個人本人の行動に依存する。この程度には、それらは生活空間の心理的ダイナミクスと結び付くべきである。しかし、残りの計算は、心理学的手法とは別の手法で行わなければならない。

ある領域のあらゆる変化を説明すること、または、予測することの本質は、その変化と、その時点の場の条件とを結び付けることにある。この基本原理により、ある事象の主観的確率は、その個人の生活空間の一部となる。しかし、生活空間から導き出せない異質な因子の客観的な確率は除外される。